

[博士論文概要]

博士論文

漫画の場景と實際の眺望に基づく  
東京タワーの景観の保全・活用に関する提案

平成 27 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

大竹由夏

筑波大学

東京タワーは近代的な都市—東京—の原点となる建造物である。なかでもそれを含んだ周辺の都市環境とともに変貌を遂げる景観は、東京の魅力を伝えるものである。

景観を考える上で、実際の眺望と同様に、メディアに表現された场景も重要である。これらの场景は、読者・視聴者間においてイメージの共有がはかれる。とくに、漫画は、日本の出版販売数の三分の一を占めるほど大衆文化として根付いており、文化政策の一環として積極的に育成する動きもあり、学術的にも関心が高まりつつある。

本研究の目的は、東京タワーの眺望景観の保全・活用するための景観施策を提案することにある。そのために、既存の眺望景観の保全方法を整理し（1章）、日本の大衆文化である漫画に描かれた東京タワーの场景から東京タワーの魅力を明らかにした上で（2章）、インタビューにより認知できる東京タワーの見方を明らかにし（3章）、現地調査を行うことで東京タワーの眺望景観を把握し（4章）、8つの代表的な東京タワーの眺望景観の種類を目標景観像と定め、同様に望見できる重要眺望点を選定し、保全すべき眺望景観誘導範囲と眺望景観形成を設定することによって（5章）、それぞれの眺望景観を活用する具体的な提案を行う（6章）。

各章の概要は以下の通りである。

序章では、日本の都市における眺望景観の保全をめぐる社会背景と東京タワーの眺望景観を保全する意義について、また、既往の研究成果と漫画の特徴について、さらに、漫画に描かれた场景を東京タワーの魅力を明らかにする手段とする意義について述べた。

1章では、既存の眺望景観保全の取り組みとそれらの研究について調査し、眺望景観は、その土地を象徴する魅力あるものを眺望主対象とし、保全したい具体的な目標景観像と定めたうえで、その像を望見できる地点に重要眺望点を設定し、眺望景観誘導範囲と眺望景観形成を設定することで保全されていることを明らかにした。また、2章から6章において調査すべき事項を導いた。

以上から、眺望景観の保全において、眺望主対象としての魅力を明らかにすること、また、具体的な目標景観像を定めることが必要であると結論づけた。

2章では、漫画に描かれた東京タワーのイメージを考察した。東京タワーが完成した1958年以降の漫画作品を探索し、1982年から2010年までに出版された23作品333コマを収集した。これらでは、東京タワーは、東京、日本、高度経済成長期、恋愛、社会的地位、恋愛、希望、孤独を象徴するものと表現され、また、見上げるものからまっすぐ見るもの、見下ろすものへと変化していることが特徴とされた。とくに、2000年以降の作品には、見下ろすものが多くなり東京タワー周辺が高層化した現実が漫画にも反映されていることを指摘した。このように、東京タワーの眺望点は、タワー足下、街路公園、寺、海岸、料亭、船上の「地上レベル」、電車内、高速道路上の「高架レベル」、または、空中、屋上、マンション、ホテル、オフィス、病院、レストランの「高層レベル」であり、これらのほとんどがタワーの大展望台が描かれていたことがわかった。さらに、東京タワーの眺望景観の種類は、足下景・公園景・寺社景・街路景・高速道路景・電車景・水辺景・上空景の8つにわけられた。

このように、東京タワーの魅力は象徴の豊かさと眺望景観の豊かさにあり、これらの魅力を活かすためには、複数の重要眺望点を設定し、眺望景観を保全していくべきであることが明らかになった。そこで、8の眺望景観の種類が保全すべき東京タワーの目標景観像であると仮定し、3章から6章にて、具体的な景観形成を提案することとした。

3章では、東京タワーであると認知できる見え方について調査し、東京タワーの重要眺望点となり得る地点について論じた。250人にインタビューを行い、東京タワーと認知できるには、東京タワーの大展望台までがみえることが重要であることが明らかになった。また、東京タワーが見える領域を「可視域」、見えない領域を「不可視域」と定義した。さらに、可視域のうち、東京タワーの大展望台が見える領域を「認知レベル1」、東京タワーの大展望台は見えない領域を「認知レベル2」とした。

そして、東京タワーの眺望景観において、重要眺望点から得られる東京タワーの見え方は、少なくとも、それが東京タワーと認知できるように、大展望台まで見える必要があると結論づけた。

4章では、東京タワーの重要眺望点となり得る良好な東京タワーの眺望景観が得られる地点を現地にて目視調査を行いまとめた。3章で示したように重要眺望点となり得る地点とは良好な東京タワーの眺望景観が得られる地点であるとし、東京タワーの大展望台が見える地点である認知レベル1と判断される範囲を調査した。対象地は、1章の既存の眺望景観保全の取り組みにおける重要眺望点と、2章の漫画に描かれた東京タワーの眺望点に基づき、タワー正面、周辺街路、芝公園、増上寺、東京湾岸・隅田川岸、首都高速道路、JR 山手線、展望台とした。

このように、調査が可能である、地上レベルの近景・中景・遠景の領域内と、高架レベルの中景の領域内と、上空レベルの遠景の領域内において、良好な東京タワーの眺望景観が得られる地点を明らかにした。

5章では、8の眺望景観の種類を目標景観像と定め、同様に望見できる重要眺望点を選定し、保全するための眺望景観誘導範囲、眺望景観形成を設定した。「①タワー足下(敷地北西入口)」、「②芝公園(4号地御成門駅付近)」、「③増上寺(大殿前)」、「④街路1(六本木五丁目交差点付近)」、「⑤街路2(札の辻交差点付近)」、「⑥首都高速道路(芝公園出入口付近)」、「⑦JR線(浜松町駅北口付近)」、「⑧隅田川テラス(わたし児童公園付近)」、「⑨展望台1(六本木ヒルズ)」、「⑩展望台2(貿易センタービル)」の10の重要眺望点を選定できた。これらは、地図上に示し、さらに地名と経度緯度で表記した。目標景観像は、選定した重要眺望点ごとに、眺望景観景観の種類と要素、漫画の場景と写真を明示した。眺望確保エリアは、重要眺望点と東京タワーの両端を結ぶ三角形を基本とした範囲に設定した。眺望確保エリアにおいて、目標景観像としての眺望景観が得られるように、高さ制限を定めた。眺望景観誘導範囲は、東京タワーを中心とした南北およそ1000m、東西およそ500mに設定した。眺望確保エリアの重なる地区である。また、首都高速道路とJR線の地理的条件を考慮した。眺望景観誘導範囲において、高さ制限、並びに、芝公園と増上寺における緑地保全を定めた。

これらをまとめ、東京タワーの眺望景観保全マップを作成した。

6章では、5章で提案した東京タワーの眺望景観を保全する施策を活用する提案を行った。8の眺望景観の種類を活用する提案、「アクセスルート」、「車窓

景・乗船景」、「新規展望施設」を挙げた。

「アクセスルート」とは足下景・公園景・寺社景・街路景を活用する提案であり、良好な東京タワーの眺望景観が得られる地点、とくに重要眺望点①～⑤を通る最寄り駅から東京タワーまでのアクセスを明示したものである。「車窓景・乗船景」とは街路景・高速道路景・電車景・水辺景を活用する提案であり、重要眺望点④と⑤を通る路線バス、⑥を通る首都高速道路、⑦を通る JR 線、⑧付近を通る舟運を紹介し、アナウンスなどで乗物からの東京タワーの望見を宣することで、東京タワーを意識させることを挙げたものである。「新規展望施設」とは水辺景・上空景を活用する提案であり、東京タワーの眺望を阻害する建造物を、絶対に建ててはいけない、という厳しい施策をつくるのではなく、重要眺望点①～⑩以外にも、新たに公共的な展望施設をつくるなど柔軟な施策が必要になることを挙げたものである。

これらをまとめ、東京タワーの眺望景観活用マップを作成した。

終章では、本研究を総括し、今後の展望を述べた。